

---



---

## 「IC レコーダを活用した語学教育と学習者の形式に関する意識を巡る試み」

---

研究代表者	メベッド シェリフ	(法学部)
共同研究者	ロザーティ サイモン	(経済学部)
	今村 潔	(経営学部)
	ホワイ ト ショーン	(経営学部)

### 1 FD プロジェクトの目的

近年、英語教育の授業内活動に注目が集まっている。教育における質の向上が益々重要視されている。日本の大学を卒業する社会人がグローバル経済の中に活動できるように英語運用能力をより育成する必要がある。その一環として、分かりやすい発音や正確な文法を使って英語ができることが言うまでもなく肝心である。また、現在は多くの電子機器が存在し、教育の場でも、コンピュータやスマートフォンの教育活用が拡大している。しかし一方、コンピュータなどの機械を授業で使おうという傾向が強まり、他方には実際それらの機材が実際学生の英語能力の向上に役立っているのか。逆に、授業の時間を無駄にする場合もないではないか。特にスピーキングの授業で、学生は教室の中でコンピュータの操作で時間を費やし、他の学生と距離が生まれるという恐れがある。そのため、本 FD の研究では、デジタル・レコーダとう機械の導入し、少しでもデータを収集して分析する。

もう一つの目的は、本研究で使われるデジタル・レコーダは自立学習を促進するのではないかと考えている。龍谷大学の学生のみならず、日本の大学生全体は自立学習の習慣があまりない。まだ、中高教育の受動的な勉強のしかたが根強い。自発的に学んで、その中で得た情報の質を自分で判断するという過程を学ばなければならない。そこで、今回の FD 研究は、どのように学生が英語の上達を自分中心に進めるのかという課題を兼ねて実施する。このデジタル・レコーダの正しい使い方と学生の自立学習の促進という二つの問題を改善しようとし、本 FD 研究を行ってきた。

### 2 プロジェクトの概要と計画

本研究では、学生のスピーキングの能力を向上させる目的、小型デジタル・レコーダを用い、授業中に一人一人の学生の声を録音して、自分でその音声を聞く。教員は考えるべきポイントを黒板で指摘する。学生一人一人が自分の発音や文法能力の問題に気づいて、意識することが目的である。本研究で、デジタル・レコーダを用いて学生はイントネーション、B と V の発音、L と R の発音、th の発音そして、文法の使用を確認する。

まず、FD の中心のデジタル・レコーダについて説明する。学生は自分の声を聞くため、機械に声を吹きこむ。今、デジタル・レコーダは使いやすく、運びやすく、値段が手頃という点に注目した。同様な機能はスマートフォンなどにも付いているが、学生は必ずしも持っているかどうかは分からなく、携帯のメーカーなどによって使い方が様々で、以前、学生の所有するスマートフォンを使った類似する研究はうまく行かなかったのである。そして、教員が授業の後に学生の声を聞こうと思った場合には、学生の所有するスマートフォンを借りるわけには行けない。またレコーダの価格は一個当たり 7 千円以下という安い値段で購入できるようになった。

#### (1) 機械の購入

FD 研究開発プロジェクトの予算でデジタル・レコーダを 25 個を購入した。学部共通英語コースの授業の多く、特にスピーキング中心の英語の授業は 25 人以下であり、全ての学習者が使えるようにレコーダを 25 個準備した。また、電池と充電器なども購入し、鍵付きのキャビネット

トも買った。機械自体は良い性能を持つもので、音楽のコンサートなどでもうまく録音できるものであり、騒音の多い教室でははっきりと学生の声を捉えることができるレコーダである。また過去の経験から性能の良くないデジタル・レコーダは使いにくいという難点がある。

## (2) 教室での使い方

デジタル・レコーダは、英語コミュニケーションの教室において、様々な使い方があるが、ここで、実際学生と一緒に行った一つの例を紹介する。学生は筆者のオーラル・コミュニケーションの受講者で、15人である。レベルは共通英語コースの「エ組」簡単な会話はできるけれども、ミスも目立つグループであり、学習態度も大変良好である。

学生を二人ずつのグループに分けて、レコーダを全員に渡す。録音と再生の仕方を簡単に説明する。そして以前に説明した発音のポイントをもう一度、簡単に復習する。その後、会話のテーマを紹介する。今回、もうそろそろ冬休みだったので冬休みの予定や計画について会話の準備を行う。少し、自分の冬休みの予定を考えさせる時間を与えた上で、ペアでその会話を試みる。会話はそれぞれのデジタル・レコーダに録音する。3分の会話の後に、学生は自分の録音した音声を聞く。次は、修正せずに、間違いを含めて紙に書き写す。その後、書き込んだ会話をもう一度、文法のポイントを踏まえて、赤ペンでミスを修正する。そして教員に見てもらって確認する。

このプロセスによって、学生は自分の文法のミスを意識し、自分で学ぶという習慣方法を経験できる。間違いを教員によって指摘されて学び直すという従来の教育と異なり、自分で気づくことの方が有効であるという概念が現代の英語教育の主流である。それに教員の採点に費やす時間を減らすという効果もある。

書き写すことや文法のミスの直しが済んでから、学生は録音した音声をもう一度聞き、発音の方に注目する。また録音した声を聞き直し、発音の正確性について考える。この時に教員は学生に個人的な指導を行う時間があるので、音声の正しい発声の仕方を指導できる。そして、学生は、より正確な文法と発音を用いて、同じ課題の会話を別のパートナーと練習する。最後に学生はこの一連の学習について簡単なレポートを書く。レコーダを使った授業での学習の目的は一つに間違った文法をより性格にすることだが、もっと重要な狙いは学生に自分の英語運用を意識し、自分の英語を自分で直させるということである。つまり自立学習の能力を発達させることである。

## (3) 本プロジェクトにおける学生の反応

本FD研究において、学生の自分の発声する英語をより意識することが目標であるので、この研究から得たデータは学生のアンケートである。10月14日のオーラル・コミュニケーションの授業で上に説明した学習のプロセスを行い、その後アンケートを記入してもらった。発音のポイントが四つと文法のポイントが一つあり、それぞれについて設問があった。以前の講義で学んだ英語のイントネーションや発音の仕方を参照に、学生たちは自分の発音を判断する。判断の度は1から10である。ネイティブに近い発音は10で、カタカナで発音したような発音は1であった。目標は8くらいであった。15人の学習者は参加していた。学生の自己判断は次の通りである。

## (4) データの分析

## 学生の自己評価

参加者番号	イントネーション	B and V	L and R	th	未来構文
1	5	4	8	8	4
2	6	4	5	2	2
3	2	2	3	2	9
4	6	4	3	5	5
5	4	5	5	6	3
6	7	5	5	5	3
7	5	4	4	4	5
8	2	3	3	3	2
9	4	4	3	3	3
10	4	4	4	4	3
11	1	1	1	1	10
12	X	3	3	5	5
13	4	4	4	2	4
14	4	4	4	4	4
15	5	5	5	5	6
平均点	3.9	3.7	4.0	3.9	4.5

上記の表で学生が自分の録音を聴き、五つのカテゴリにおいて自己評価を述べている。学生の焦点をそれぞれの問題に絞る目的があった。多くの日本人の学生は謙遜であり、自己評価を高く評価しない傾向があることは周知のことである。特に発音の点数の平均点が低い。もっとも平均点の高い科目は未来構文というポイントである。つまり、文法より、発音が改善すべき課題であるという意識が反映された。本 FD では、文単位のイントネーションに注目した。英語はセンテンスの始まりにイントネーション（ピッチ）が上がり、文の最後に下がるという点を授業で練習していた。この点は、中高教育では、ほとんど取り上げることはないだそうである。自己評価でもその難しさを示す点数が現れている。学生の自己評価から見て、それぞれのアイテムに対する意識が高まっていると思える。

しかし、学生に以前から発音を改善すべきであることを知っていた可能性がある。発音の諸問題を前から意識しているなら、本研究の活動は必要ではな可能性がある。そのような反論が考えられるので、本研究は実際学生の言語能力に対する意識を変えたのかという問題に答えるように次のデータがある。以下の表には、学生の意見を知ることができる。コメントを書く欄は自由であったので、コメントを残したい学生の声のみを紹介する。7人の学生はコメントの欄に全く書いていない。

参加者番号	コメント
1	自分の声を聞くことにより強調しなければいけない所などができていなかった。そのような部分を直していきたい。
2	Th の発音がうまくできなかった。
4	声がこもっていた聞きづらかった。
7	I am able to find a habit of speech. (話す時のくせを知った。)
8	I knew my pronunciation. (自分の発音を知るようになった。)
9	間違いがわかった。
10	自分の思っているよりも発音出来ていないのもっと発音の練習をしたい。
12	自分でははっきり話しているつもりだが、聞いてみると、発音の LR の差などが全然分かりにくい。

参加者番号 1 の学生は、「直していきたい」という表現で、はっきりと今後自立的な学習計画を立てるように見える。参加者番号 2、7、8、9 の学生は自分のそれぞれの問題点を意識するようになり、参加者番号 10 の学生は発音をもっと学ぶことを決心した。参加番号 12 の学生は L と R の発音をより、明確にする重要性を理解できたようである。

### 3. 結び

上記のデータによって学生はデジタル・レコーダによってミスや発音の問題に対する意識が上がったと思われる。今回の FD では、学生自身が自分の英語能力を自分で判断し、自分で改善させる方法を探らせることであった。また、その方法を探し出すことが焦点であった。そして、その目的以外、学生はレコーダの利用から利益があったと思われる。例えば、学生は録音した声を聞き、文法のミスや発音の問題を気づき、その同じ会話を別の学生と一緒に繰り返して試み、ミスした文法や苦手な発音の項目を修正しながら話す。つまり、学生本人が自分の言語運営の問題についての意識を高めるだけでなく、その修正作業にレコーダが役立つということを強調したい。また学生はレコーダを使って授業内の発表などを録音してそれを参考にして、英語能力を高めるように努めるなど、様々な使い方がある。

この研究の一つの重要なポイントは大量の学生がいる授業では、教員にとって、一人一人の学生の発音や文法を聞いて、アドバイスをする時間が不足している。また、授業が終わり、学生は大学から離れて行く。教員の助けに頼ることができない。この作業によって教員がいなくても、英語能力を向上させることを理解してもらえ。先生や大人に頼る必要はないということを学習する機会である。自分の教育を自分でコントロールできるということも学べる。デジタル・レコーダは、現代の重大な教育問題の解決に少しでも貢献すると思う。

#### 4. 今後の展望

現在、この研究でデジタル録音機を25個所有している。上に説明した研究活動では、学生は一人一個ずつ使っていたが、実は二人に対して一個のデジタル・レコーダでも活動ができる。FDの中では20人未満の授業で試験的に使っていたが、25個のレコーダは最大50人の授業で使用できる。このように、学部共通コースの教員が広く使用すると良いと思われるが、アクセスの問題がある。一個のレコーダは5千円もかかるので、鍵のあるケースで保管する必要がある。ケースは英語共通コースの部屋に置いていおり、鍵はメベッドが管理しているが、このように非常勤講師は容易にアクセスしにくいという問題がある。今回よりアクセスしやすくなるように対策を考えて行く。非常勤講師などが容易に機デジタル・レコーダを使用できるように継続的に対策を考える必要がある。

最後に、非常勤講師や研究に参加していない先生方が授業でデジタル・レコーダの使い方が分かるように、トレーニングのFDセッションを行う予定である。非常勤や関心のある先生を呼んで、FDセッションを2015年の春学期中行う予定である。